

「聖地」へと至る尾道というフィールド

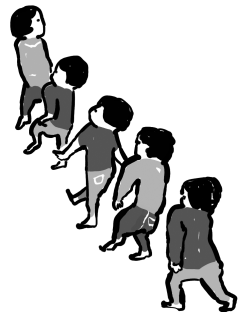
—歌枕から『かみちゆ!』へ—
玉井建也

はじめに

オタクたちがアニメや漫画などの作品の舞台となった場所を訪れることを「聖地巡礼」という言葉でもって語られるようになった(1)。このような行動自体は決して、ここ数年に限った出来事ではない。柿崎氏が述べているように、九〇年代初頭であっても『究極超人あゝる』(2)のOVA(3)で取り上げられたJR飯田線をファンが訪れるといった行動はあったわけであるし、アニメや漫画などに限らなければ様々な文学作品の舞台を訪れるといったことはそれ以前から数多くみられた。しかし、近年の「聖地巡礼」という現象が着目されるのは、地域振興などと結び付けて「萌え起こし」といった活動もみられるようになってきている点が非常に大きいであろう。単にオタクたちが舞台を「聖地」として訪れるといった点だけでなく、そのような現象を受けて、舞台となった地元側が様々

なイベントや記念グッズの販売などを行い、町や商店街が一体となって地域振興として「聖地巡礼」を迎えていったという点が非常に重要である。そのような中で一際脚光を浴びているのが、アニメ『らき☆すた』(4)の舞台となった鷺宮神社であろう。

アニメ『らき☆すた』にて主人公のうちの二人である柊かがみ、柊つかさ姉妹の家の神社のモデルとして取り上げられたのが埼玉県北葛飾郡鷺宮町にある鷺宮神社である。ストーリー内で鷺宮神社が描かれるだけでなく、オープニングにても印象深く描かれてはいるが、当初は一部のファンのみが訪れるものとして認識されていた。しかし、『月刊ニュータイプ』二〇〇七年八月号にて「らき☆すた」の「遠足のしおり」ポスター」などで取り上げられ、さらにはファンたちが実際に訪れた様子をブログ等で取り上げ、ファン同士で交流を行っていったことなどによって、鷺宮神社への「聖地巡礼」が大きなムーブメントになっていった。それに対して、鷺宮町商工会や幸手市商工会、春日部特産品PR事業部などが中心となって様々



な限定グッズ販売やイベントが企画され、双方向的な盛り上がりを見せたこともブームに拍車をかけた一因である。このような現象はアニメ放送が終了した二〇〇七年九月から数年間という時間が経過した二〇〇九年になっても同様の様相をみせており、今や「聖地巡礼」や「萌え起こし」といえば「らき☆すた」および鷲宮神社が取り上げられるまでになっている。

これらの動向を受けてか、「聖地巡礼」に関する研究もまた鷲宮神社を対象としている⁽⁵⁾。岡本氏や山村氏、佐藤氏は鷲宮神社の動向を実証的に把握しようとした研究であり、丸田氏は鷲宮神社を中心とした「聖地」に関する概念的な研究であることが指摘できよう。しかし、例えば柿崎氏が取り上げた「聖地」は全国で十二ヶ所あり、『ゲームラボ』二〇〇九年一月号の特集「総力取材！「萌えおこし」の裏側」では「らき☆すた」以外でも四ヶ所が取り上げられていることから分かるように必ずしも鷲宮神社のみで「聖地巡礼」が行われているわけではない。全国各地で「聖地」と呼ばれる場所が認識され、存在している。そこで本稿ではアニメ『かみちゅー！』の舞台となった尾道に焦点を当て、鷲宮神社以外での「聖地巡礼」の動向やその歴史的背景にまで踏み込んで考察を行っていく。

一 尾道を訪れるということ―近世から近代にかけて―

尾道は現在、広島県尾道市であり、江戸時代には海運業が発展し、ヒト・モノ・情報が入り乱れた場所でもあった⁽⁶⁾。そのような中、発展していった尾道は、旅人が訪れる場所としても認識されていた。特に文化十三（一八一六）年に亀山士綱によって書かれた「尾

道志稿」巻之九⁽⁷⁾をみると次のように書かれている。「名勝〇尾道、古名、玉の浦、萬葉集に出ツ、詳に初巻に見へたり」とあるように、江戸時代においては万葉集の歌枕であり、名勝として認識されていることが理解できる。では、実際に尾道を訪れた旅人はどのような視線を土地に向けていたのであろうか。

享和二（一八〇七）年に尾張の商人菱屋平七が名古屋から京都・大坂、そして瀬戸内海を経由し、長崎に行き、その後、博多経由で西国街道を移動し、大坂に至るまでを記録した「筑紫紀行」⁽⁸⁾にて、江戸時代の尾道の様子が描かれている。

北東は山にて南は入海の湊なり、町家五六千軒あり、町通り家居のさまなど、上方に替る事なし、商家は萬の間屋おほし、肴の市、野菜の市たつ、穀物・干鰯・綿種・鹽などつめる船ども、諸国より夥しく輻輳す、寺は皆山の手たかく聳えてあまたみゆ、北西の方を三丁程のぼれば、仙光寺といふ寺あり、此庭に高さ三四間ばかりなる玉のごとく登徹たる石あり、これによりて玉のうらともいふ、或人の萬葉集にぬば玉の夜はあけぬらしたまの浦にあさりする田鶴なきわたるなり、とあるも此玉の浦の事なるべしといへり、さればいとふるき名所なり、さて東南のかたの町端に、築出しの新天地あり、此内皆酒屋にて、藝子女郎などあり、津の国の兵庫よりこ、までの間に第一の大湊なり、

ここで書かれているように、尾道の町が発展し、特に各地の船が様々な商品を運び入れている様子がうかがえる。その様子は大坂とは変わらず、兵庫から西においては一番の大きな港と書かれるほど

であった。また、旅人の目からも尾道の「仙光寺」の石が万葉集で詠われた玉之浦の歌枕になっている点は、着目すべきポイントであったことも理解できる。では、近代に入ってからはどうであろうか。

明治二七（一八九四）年に書かれた小阪清作編『西備名所案内』（⁹）では、尾道は「中国枢要の商業地にして巨商富貴軒を並へ、港内には帆檣、常に林立し、海上汽笛の声は陸上汽車の音と相応して昼夜絶へず、海陸の交通斯く便利なるを以て百貨輻湊し埠頭山をなす、是れ大坂以西最も著名の商業地たる所以なり」と書かれている。これは近世期と同様の様相であり、商家が立ち並び、海運が発展した町であることがうかがえる。また、同書には尾道の名所が一つ一つ挙げられ、それぞれに説明文が付されているが、それらの文章の前に総括的に「尾道は一に玉の浦と云ふ、是れ或は千光寺の烏帽子巖に宝珠ありたりと云う俚諺に基きたるものならんか、又一に鶴の港と云ふ其地形の似たる以てなり」と書かれている。こちらになると万葉集の話は書かれていないが、玉之浦という点が尾道を語る上では欠かせない点であったことは理解できる。しかし、前述のような万葉集の歌枕であるという認識は次第に希薄となっていくたようである、明治三二（一八九九）年に書かれた森田保之編『広島県地誌』（¹⁰）には尾道に関して次のように記述されている。

尾道市は、人口二万余ありて、繁華なる市街なり、（中略）港内、波静かにして、船舶の碇泊に便なれば、帆檣、常に林立せり、此地は、海陸の運輸、便利にして、商業の盛なること、縣下第一と称す（中略）後方に、一帯の山脈あり、神社・寺院多

し、其中、西国寺・千光寺等、最もあらはる眺望極めて佳なり
ここでみられるように尾道市が海運によって栄えた場所であることはやはり強調されて書かれている反面、その他の名勝的なものを取り上げた記述としては西国寺・千光寺などでは眺めが非常に良いことが述べられているだけになっている。大正五（一九一六）年に書かれた全国各市小学校聯合会編『国定教科書教材解説』（¹¹）でも、同様に尾道が海運栄えている点を述べた後、名勝としてまず一番に挙げられているのは「聖徳太子の草創なり」とされる浄土寺であり、千光寺に関しては「眺望絶佳なり」とされているだけである。

では、尾道を訪れた旅人はどのような印象を抱いたのであるうか。明治三五（一九〇二）年に書かれた中村修一の『徒步旅行』（¹²）では尾道を訪れたとき、「尾道の街路は頗る狭い、車が通れば人は小さく左右の軒下へ附かねばならぬ處が多い、東西に貫通せる国道だけは稍広いが、横町は概して狭い」という感想を述べている。彼自身あまり尾道に良いイメージを持たなかったとみえ、そのような狭い路上であるが故に、行水をしている人に断りを入れて道を通らなければならぬことに「実に不体裁千萬なものぢや」と述べたり、「備後は一体に掃除が行届かぬ方ぢやが、尾道は汚い割合に悪疫が流行しない」と述べた後、その理由を尾道の地形によるものだとしたり、「尾道の海岸を歩くと干鯛臭くて耐らない」と感想を述べている。このような中、彼が尾道で訪れた場所は千光寺、西国寺、浄土寺、天満宮の四つである。これらに関しては、既述のような万葉集の歌枕であることへの記述はみられず、階段の多さや眺めの素晴らしさに紙幅が割かれている。

以上のように、近世期は万葉集の歌枕としての名勝を抱え、近代に入つて以降は次第に社寺参詣とそこにおける眺望の良さが尾道という場所への認識となつていったことがうかがえる。しかし、その後、大きな転換点を迎えることになる。

二 舞台の創出と探訪―『東京物語』から尾道三部作へ―

小津安二郎の監督による『東京物語』が公開されたのは、一九五三年であった。この作品が国際的にも非常に高い評価を得たことや、その後何度かリメイクをされたこと⁽¹³⁾、影響を受けた作品が作成されていったこと⁽¹⁴⁾などを受けて、尾道という場所は映画の舞台として認識されることになっていく⁽¹⁵⁾。したがって、尾道を訪れる人々にとつても、『東京物語』の「尾道」という認識が出来上がる。その後、尾道という場所を舞台にした作品は数多く発表され、尾道という場所に対するイメージ・認識はそれらによつて塗り替えられていくことになる。特に大きなターニング・ポイントとなつた作品が大林宣彦監督による尾道三部作であろう⁽¹⁶⁾。

近年はなんとといっても尾道出身の映画監督大林宣彦の町だ。中略)そのために市では「ロケ・マップ」まで作つて、映画のロケ地を紹介しているほど。商店街には大林監督の似顔絵を描いた提灯まで下がっていた。しかし、私の世代では尾道という「東京物語」の印象が強い。

以上は川本三郎のエッセイ⁽¹⁷⁾からの引用だが、尾道という場

所が世代によつて、『東京物語』の舞台であったり、大林作品の舞台であったりすることがわかる。川本氏は尾道探訪を『東京物語』に合わせて、東京駅から夜行列車に乗り、尾道だけでなく、瀬戸田や大三島を訪れるなどといった行動を取っているが、大林作品を見た人々は違う行動を取るようになる。

「バカア!そんな気持ちの悪いことすつか、何でたまのオフをオサムとデートせにゃあかんのよ。学研のさ『行きそで行かないとこへ行こう』の取材としてさ、学研のお金で尾道に行っちゃおうと思つてさ」

「あ、いっすねえ、尾道かあ、大林映画の舞台ですわね」

これは大槻ケンヂのエッセイの一部である⁽¹⁸⁾。取材先である尾道という地名を聞いただけで、そのまま大林作品の舞台であることへ直結している。つまり、彼らにとっては前述の川本氏とは違って、尾道＝大林作品であったのだ。その後、大槻氏は尾道にて大林監督が訪れたことのある喫茶店に行った後、次のような行動を取っている。

不思議なことに四人ともこの階段を以前見たような気がするといった。同時デジャブ状態!程なくその理由がわかった。オサムが言った。

「これ『転校生』の冒頭に出てくる階段だ」

「オー!」と他の三人は一斉に声を上げ、すぐに記念撮影となつ

た。

自分の好きな映画のロケ地を捜す作業というのは、まるで少年時代に一夏だけ過ごした部活の合宿所に再び行くような、不思議な懐かしさがある。

ここからわかるように大槻氏は、尾道の中における大林作品の舞台となった細かい場所を探す作業に没頭する。しかし、このような行動自体は決して大林作品特有のものではなく、前述の川本氏も「持参した『東京物語』のステル写真で確認すると、二人が立った場所はいま鐘楼が出来ているところらしい」と写真を持ち、それと見比べながら場所の特定を行っている。このような行動だけを切り取ると単に作品を視聴した世代ごとによって、見る景色が違うだけともいえる。しかし、このような大林作品を見た観光客の行動を既述の川本氏が述べているように尾道市はロケ地を紹介するマップを作るといった活動によって対応している。

尾道周辺の観光ガイドに目を通し、『転校生』が撮影された場所の、あたりだけはつけておこうと思った。ところが驚いたことに、どのガイドブックにも詳細に写真とマップ付きで、大林尾道映画の全作品の撮影場所が解説されているではないか。

このように田沼雄一氏が述べているように⁽¹⁾、尾道市が作成したものでではなく、様々な観光ガイドには『転校生』を筆頭とした大林作品のロケ地が分かるように地図や写真で紹介されている。そしてこのような状況は次のような言葉からもわかる。

『転校生』が公開されてから尾道を訪れるお客さんの層が若くなったそうだ。

「昔はお寺めぐりが主でした。近頃は大林映画のロケ地めぐりですからね。大林映画は尾道に住んでいる者や出身者にとって大きな励みになってるんです」

大林宣彦の製作オフィスPSCの尾道製作補である吉田多美重氏の言葉である⁽²⁾。これからも分かるように、大林作品の公開によって、尾道は大きく様変わりし、訪れる観光客の目的は社寺参詣から大林作品のロケ地めぐりへと変化していったことがわかる。

以上のように、近世期には歌枕であり、近代以降は社寺参詣（およびその眺望の良さ）が尾道の主たる他者イメージであったが、小津安二郎の『東京物語』の公開、そして特に大林宣彦による尾道を舞台とした一連の作品の公開によって観光客が大幅に変化し、さらには彼らが訪れる場所もまた映画のロケ地が主たるものとなった。では、近年はどう変化しているのだろうか。

三 「聖地」と「巡礼」——「かみちゅ!」を通じて——

現代コンテンツの中で、尾道を舞台にした作品がいくつか発表されている。その代表的な作品として挙げられるのは、アニメ作品である『かみちゅ!』⁽³⁾である。この『かみちゅ!』は二〇〇五年にテレビ朝日系列で放送されたアニメ作品で、平成一七年度（第九回）文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞を受賞している。架空の町「日の出町」に住む主人公である中学生の一橋ゆり



図2: 上段は御袖天満宮、下段は来福神社



図1: 上段は神社、下段が来福神社

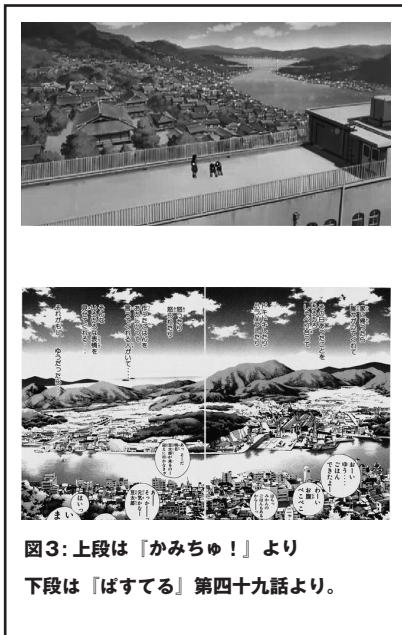


図3: 上段は『かみちゅ!』より
下段は『ぼすてる』第四十九話より。

えがある日突然、神様になってしまおうところから物語は始まり、同級生、地元の来福神社およびそこで祀られている八島様らの助力を得ながら、神様の仕事をこなしていく。タイトルの「かみちゅ」は「神様で中学生」から来ている。この作品は尾道を舞台としているわけだが、エンディングで「協力」として「尾道の皆さん」とクレジットが表記されている以外は、この作品が尾道を舞台にしたものであるということは明記されていない⁽²⁾。しかし、「かみちゅ!」では非常に丹念に尾道の風景が再現されているがゆえに、尾道に住む者や訪れたことのある者は見ただけでその舞台が理解できるようになっている。では、その再現された舞台の一端を挙げてみる⁽³⁾。

まず一番に着目すべき場所としては来福神社が指摘できる。この作品の主人公である一橋ゆりえを全面的にバックアップしていく神

社であり、友人である三枝祀の実家でもある。来福神社のモデルとなっているのは良神社と御袖天満宮をミックスさせたものとなっている。図1を見てのとおり、来福神社の社殿は良神社の社殿をモデルとしている。そして図2は来福神社へと至る参道を描いた場面だが、社殿以外の部分は社殿に至るまでの階段などを含めて御袖天満宮をモデルとしている。

また、数多くのカットに入ってくるのが、尾道の景色の描写である。既に述べてきたように近代期からその眺望の素晴らしさは評価されるものであり、他者へのアピールたりうるものでもあった。これに関しては「かみちゅー」だけでなく、同じく尾道を舞台にしている『ばすてる』(2013)、『タビと道づれ』(2013)などでも遠景や坂の風景が描かれており、尾道の特徴付けるものであるといえる(図3参照)。その他、数多くの場面で尾道の風景描写がされており、ここではその詳細を省くことにする。

以上のように尾道を舞台とした作品内では、特に『かみちゅー』に特徴的であるが、尾道の風景、建造物を写実的に描写することで、尾道という地名を強調しなくとも、その場所が尾道であることが視聴者・読者にある程度理解できるようにつくられている。そのため、『かみちゅー』に関しては、例えば、放送直後からネット上を中心として作品の舞台が尾道ではないかという推測がなされ、その後、多くの聖地巡礼が行われるようになった。細かい部分にまで尾道の風景が描きこまれているが故に、この作品を見て、実際に足を運び、さらにはそれをブログやホームページなどにアニメのキャプチャー画像と現地の画像とを対比する形式でアップするケースが数多くあり、それによって実際に検証がなされ、場所の同定が行われていっ



図4: 御袖天満宮の絵馬およびノート。

た。そしてさらには、それらのウェブにアップされた情報を見て、実際に足を運ぶといった循環がみられた。

これらの動向の中で特徴的なのは、来福神社のモデルとされている御袖天満宮にファンが描いた絵馬が多数奉納されていることである(図4参照)。「らき☆すた」における鷲宮神社でも同様の現象がみられるが、この御袖天満宮においても奉納されている絵馬には『かみちゅー』の登場人物などを描いた絵馬が数多くみられる。また、御袖天満宮は菅原道真を祀った神社であるが、これらの絵馬の特徴としては絵馬で呼びかける(お願いをする)対象が菅原道真ではなく、一橋ゆりえであることが大きなポイントである。ただ単に絵を描くといった点やアニメの感想などを述べているものもあるが、それらの中に「志望校合格」や「就活がんばる」といった願いもまた

同様に含まれている。また、これらの絵馬と同時に「参拝記念兼かみちゅ！巡礼記念ノート」も用意されており、「聖地巡礼」者の交流と足あと記録として機能している。

このような「かみちゅ！」をめぐる「聖地巡礼」を受けて、尾道の地元からもこれらを受け入れる動向がみられた。二〇〇八年八月八日から八月二十四日にかけて尾道商店街にて「かみちゅ！展」⁽²⁶⁾が開かれ、「かみちゅ！」関連のグッズ販売、アニメのパネル展示、尾道の風景写真展示などが行われた。この展示には延べ人数で二二五一名の来場者数があり、また、二〇〇八年八月二三日には御袖天満宮にて「かみちゅ！」上映会が開かれ、こちらも二〇〇名といった人々が訪れた⁽²⁷⁾。

以上のように、「かみちゅ！」を代表として尾道を舞台とした作

図5：上段はかみちゅ！展の様子、下段はかみちゅ！展にて配布された地図。



品が発表され、それらを受けて尾道への「聖地巡礼」がみられるようになった。そしてその動向に対し、神社ではノートを置き、参加者の記録や記念、交流をはかり、地元側からも展示や上映会を開くといった動向がみられ、双方向的な活動が行われた。では、これらの「聖地巡礼」に関する動向を深く探っていこう。

四 何が聖地とされるのか

「ぶっちゃけわからねーっすよ」というのは「Omegaの巡礼 Ver1.0 ミチの始まり」⁽²⁸⁾の後書き「人は何故、聖地を求めるのか？」の冒頭部分に書かれた文章である。「聖地巡礼」自体を目的とし、それを行っている当事者自身がなぜ「聖地巡礼」を行うのかといった問い掛けには分らないと回答する。そして、「とどのつまり、作品に対する「アイ」を表現するための一つの手段なのではないか、ということを漠然と想っています」という普遍的な点を指摘している。しかし、現実には彼らは作品の舞台を探訪し、その行為を「聖地巡礼」と自称し、また他者評価でも「聖地巡礼」という語句を覆い被せられる。そのような社会現象を探るために、まずは「かみちゅ！」に関する「聖地巡礼」を通じて、彼らがどこを回ることかといった点から考察していく。

「かみちゅ！」に関する「聖地巡礼」に関しては、二〇〇九年二月現在二九の個人サイトやブログにてその紀行が掲載されている⁽²⁹⁾。これらを見ると彼らの訪れる場所は次のように大別することができる。

まず第一としては「かみちゅ！」に所縁のある場所を訪れるとい

う点である。前述の来福神社のモデルとなった良神社や御袖天満宮、ゆりえたちの通う中学校のモデルとなった土道小学校、そして一橋ゆりえの自宅のモデルとなった家、ゆりえたちが日常的に利用している日の出渡船のモデル福本渡船、登場人物らが座っていた波止場のベンチ、といったポイントが「聖地巡礼」として訪れられる場所である。これらは特に御袖八幡宮といったメルクマールの存在を中心として、「巡礼」者に必ず訪れられるといっても良い場所である。

第二として挙げられるのが、「かみちゅー」に登場する舞台であるのは同じだが、必ずしも明確なポイントがない場合である。第一として挙げたものは神社、学校、渡船場といった視覚的にも分かりやすい場所があるが、これに関しては主人公たちが通った小路や訪れた商店街、町で走っている電車、さらには主人公らが訪れたりしたわけではなくただ作中で描かれただけの看板、渡船が動かないときに渡った尾道大橋、神様ご休息センター入口として描かれた兼吉の丘や小歌島といったように、ファン以外の人にとっては「聖地」でも何でもなく、単に尾道の日常風景ともいえる場所である。前述の第一で挙げたゆりえの自宅のモデルなども一般の家なので、こちらに含めても良いかもしれない。

第三としては大林作品の舞台となった場所を訪れるケースが存在する。映画『転校生』の舞台となった喫茶こもんや御袖天満宮などは当然のこととして、ゆりえの自宅モデルの前は映画『あした』のロケ現場であり、同じく『あした』に登場する鎌倉稲荷神社『あ、夏の日』に登場する「からさわ」などといった場所を指摘することができる。これらの場所も「聖地巡礼」と同時に訪れられる理由としては根本的に「かみちゅー」自体が大林作品と同じ尾道を舞台と

していることという単純な理由だけではなく、「かみちゅー」にて描かれる場所が大林作品の舞台を上書きしているという点が指摘できる。ゆりえの自宅が映画『あした』の事故現場であることや、ゆりえ自身が祀られる御袖天満宮といった重要な箇所は全て大林作品の舞台となった場所である。ただし、このような大林作品の舞台をめぐるのは、「かみちゅー」ファンと比較すると年配の人に限りられていることも事実である。

第四としては「聖地巡礼」とは別に尾道に点在する社寺をめぐることである。これらは千光寺や縣社八幡神社、海福寺、住吉神社、大山寺、西國寺、厳島神社、山脇神社、蘇和稲荷神社、久保八幡神社、八坂神社、吉備津彦神社、光明寺といったように尾道の町に数多く存在する社寺をめぐるものである。これらは実際に尾道の『かみちゅー』に関連する様々な場所をめぐるべく、そのついでに立ち寄るといふケースがほとんどである。

第五としては尾道の景色の良さを堪能している点である。町のあちらこちらの生息している野良猫を写真におさめたり、町をめぐる路地や坂道を歩いたり、高台に上り遠景を堪能するなどといった行動である。

「かみちゅー」の「聖地巡礼」に関しては以上の五つに分類することができるといえる。これを踏まえると、訪れる場所は「かみちゅー」にほんのわずかでも関係する場所であることが彼らの目的の第一であることであるのは当然であるが、それとは別に尾道ならではの特徴が浮かんでくる。つまり歴史的な変遷を踏まえて考え直せば、彼らの行動の目的は眺望の素晴らしさ、社寺参詣、大林作品、「かみちゅー」の四つに向かっているといえる。尾道という町がその歴史

性をもってレイヤーのように積み上げてきた様々な概念・価値観を、「かみちゅ！」を中心に、さらにいえば「かみちゅ！」を基点としてつつ、咀嚼しているのである。

しかし、これは尾道という歴史性のある（と認識される）場所であるからこそ成り立つ考えであるため、ただちに「だから「聖地」である」と結論付けることは出来ない。「聖地巡礼」の行動の一つ一つを取り上げてみれば、他の大林作品の舞台を訪ねる行動などと大差はみられない。では、なぜこのように尾道においては「かみちゅ！」だけが「聖地巡礼」と呼ばれるのか。一つに考えられるのは「聖地巡礼」という語句・概念がメディアなどによって一般化され、またその言葉を被せられたのが「オタクたちがアニメや漫画などの舞台を訪ねる」という行動に対してであったことが、その一因である。

これによって、他の映画などの舞台探訪とは差別化が行われてしまった。その結果として分かるのは、前述の御袖天満宮の絵馬の様子である。あそこだけを切り取ると「聖地巡礼」として訪ねたオタクたちが他と同一しながら絵馬を奉納しているように見えるが、実際は他の絵馬（菅原道真に奉納した絵馬）と「聖地巡礼」の絵馬（一橋ゆりえに奉納した絵馬）は別の場所に置かれている。

図6のように「聖地巡礼」の人々以外の参拝客に関しては、彼らが奉納する絵馬はこのように御袖天満宮の社殿のすぐ横に置かれている。しかし、「聖地巡礼」による絵馬はそこから少し離れた場所にまとめて置かれている。このような区別化が行われることによつて、「聖地巡礼」という行動はオタクたちがやってきて、オタクたちののみの間で絵馬や記念ノートでの足あと残しが行われ、その軌跡を個人サイトやブログなどにアップし、それらをみた別のオタクた



図6：御袖天満宮における絵馬の場所
（上段：菅原道真、下段：一橋ゆりえ）

ちがまた「聖地巡礼」を行うという、オタクたちの間だけの循環作用が出来上がっている。このこと自体が他の映画などの舞台探訪と同じ行動原理であり行動パターンでありながらも、「聖地巡礼」という言葉を付与され区別化されてしまっている要因である。

おわりに

尾道において「かみちゅ！」の「聖地巡礼」へと至るまでを、その歴史的背景を踏まえてみてきた。近世期には、尾道のイメージは万葉集の歌枕としてのものが中心であったが、次第に近代へと軸足を移していくとその認識は薄れ、尾道の名所は社寺とともに眺望の良さがピックアップされるようになった。その状況に大きな転機

が訪れたのは映画の舞台となったからであり、その中でも特に大林宣彦作品の舞台として取り上げられるようになってからは、尾道＝大林作品という認識が成立し、また尾道側としても観光マップの作成などを行うといった双方向的な関係がみられた。そして「かみちゅー」のアニメ放送後はいわゆる「聖地巡礼」と呼ばれる、アニメの舞台にオタクたちが訪れる現象が起き、それらに対し尾道の地元側からも展示会や上映会を開くといった対応がみられた。しかし、このような現象をみる限り、大林作品の舞台を訪れることと「かみちゅー」の「聖地巡礼」は行動そのものを取り上げると差異がそれほどみられないのに対し、なぜ「かみちゅー」には「聖地」という言葉が冠せられるのかという疑問が生じる。彼らの行動を分析すると歴史性のある尾道という土地柄を十分に満喫した行動となっている。しかし、その歴史性だけでは「聖地」化へと繋がるわけではない。一因としてはメディアなどによって「アニメの舞台をオタクが訪ねる」＝「聖地巡礼」という構図が普遍化されてしまったことが挙げられるであろう。また、御袖天満宮をみても、一般の絵馬と「聖地巡礼」者による絵馬はその置かれている場所自体が切り離されている。したがって、オタクたちの内部におけるコミュニケーションの循環はみられても、それが外部へと波及することはなく終わっている。

以上を踏まえて考えてみると、「かみちゅー」のアニメ放送が終了して数年が経過した後も展示会が開かれるほど、絶えず「聖地巡礼」が行われていることは次のように考えられる。一つには尾道という場所の歴史性である。「聖地巡礼」を行っている人々が必ずしも直線的に「かみちゅー」に関する場所のみを巡っているわけでは

なく、社寺参詣を行ったり、風景を楽しんだりしていることもまた、長く培われてきた尾道という土地柄によるものである。また、同時に「聖地巡礼」という事象自体がメディアを通して、全国的に普遍化されていく過程でもあったことが指摘できる。これによって、他との差異化が意識的に行われてしまう結果になったにしろ、内実としては「聖地巡礼」の行動は舞台探訪と同質のものである。そしてさらにポイントとして指摘できるのは、御袖天満宮という「聖地巡礼」にとってはメルクマールともなるべき存在があったからであろう。特に絵馬の奉納という行為によって、「巡礼」参加者自身の充実とともに、絵馬に絵を描くことによるコミュニケーションといった循環行為が大きなポイントといえる。これらを考えると「らき☆すた」の「聖地巡礼」があれほどまでに盛況であるのは、鷲宮神社の存在が非常に大きく、また鷲宮神社以外の「巡礼地」ポイントの少なさは地元商工会や自治体などが矢継ぎ早に様々なイベント等を行うことで補っているといえる。

では、このような中、全国的な規模で様々な「聖地巡礼」が行われているが、それらを総体的に捉えるにはどうしたら良いのか。また、テキスト分析なども含めて作品世界と現実世界との兼ね合いなどはどのように捉えるべきなのか。といった様々な疑問が生じるが今後の課題としたい。

注

- (1) 柿崎俊道『聖地巡礼アニメ・マンガ12ヶ所めぐり』(キルタイムコミックエディション、二〇〇五年)。
- (2) ゆうきまさみ『究極超人あゝる』全九巻(小学館、一九八五・一九八七年)。
- (3) 『OVA究極超人あゝる』(監督 知吹愛弓、製作 バンダイ・メディアリング・小学館、一九九一年)。
- (4) 原作は漫画作品、美水かがみ『らき☆すた』全六巻(二〇〇九年一月現在、角川書店、二〇〇五・二〇〇八)。アニメ作品としては『らき☆すた』DVD全十二巻(監督 山本寛(第一話・第四話)、武本康弘(第五話・第二四話)、製作らっきー☆ばらだいす(角川書店、京都アニメーション、角川エンタテインメント、クロックワークス)二〇〇七・二〇〇八年、OVA『らき☆すた』OVA(オリジナルなビジュアルとアニメーション)(監督 武本康弘、製作らっきー☆ばらだいす二〇〇八(角川書店、京都アニメーション、角川映画、クロックワークス、ランティス)、二〇〇八年)。
- (5) 岡本健『アニメ聖地における巡礼者の動向把握方法の検討』聖地巡礼ノート分析の有効性と課題について』(『観光創造研究』二二号、二〇〇八年)、山村高淑『アニメ聖地の成立とその展開に関する研究』アニメ作品『らき☆すた』による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する「考察」(『北海道大学国際広報メディア・観光学ジャーナル』七号、二〇〇八年)、丸田一『地域から遊離した空間(同著『場所』論』ZIN出版、二〇〇八年)、佐藤善之『いかにして神社は聖地となったか。公共性と非日常性が生み出す聖地の発展』(『北海道大学文化資源・マネジメント論集』七号、二〇〇九年)。
- (6) 土井作治『幕藩制国家の展開・広島藩・福山藩を中心として』(『淡水社』一九八五年)、中山富広『近世の経済発展と地方社会・芸備地方の都市と農村』(清文堂出版、二〇〇五年)、勝矢倫生『徳川期尾道の経済構造・問屋商事の展開を中心に』(『尾道大学地域総合センター叢書』二二号、二〇〇八年)。
- (7) 亀山士綱『尾道志稿』(備後叢書第十巻、備後郷土史会、一九三四年)。
- (8) 菱屋平七『筑紫紀行』(『日本庶民生活史料集成』第二〇巻、一九七二年)。
- (9) 小阪清作編『西備名所案内』(尾道北辰社、一九九四年)。
- (10) 森田保之編『広島県地誌』(積善館、一八九九年)。
- (11) 全国各市小学校聯合会編『国定教科書教材解説』(浜田印刷所、一九一六年)。
- (12) 中村修一『徒歩旅行』(俳書堂、一九〇二年)。
- (13) 一九六七年にフジテレビで宮口精二主演のテレビドラマとして放送、また二〇〇二年には宇津井健らの出演で再度フジテレビにて放送された。
- (14) 小津安二郎『東京物語』に影響を受けた作品としてはヴィム・ヴェンダース監督『東京画』(一九八五年)、ジュゼッペ・トルナトーレ監督『みんな元気』(一九九〇年)、侯孝賢監督『珈琲時光』(二〇〇三年)などが挙げられる。
- (15) 小津作品を分析したものととしてドナルド・リチー『小津安二郎の美学。映画のなかの日本』(フィルムアート社、一九七八年)、田中真澄『小津安二郎のほうへ。モダニズム映画史論』(みすず書房、二〇〇二年)など、そのほか多数が挙げられる。そのなかで『東京物語』に登場する風景と実際の場所の同定を行っているのは荒木正見・鈴木石文『尾道を映画で歩く。映像と風景の場所論』(中川書店、一九九五年)、田中真澄編『小津安二郎』(『東京物語』ほか)(みすず書房、二〇〇一年)、内田順文『映画作品のなかの場所』小津安二郎『東京物語』を読む』(『国士館日本文学部人文学会紀要』三五号、二〇〇二年)、荒木正見・鈴木石文『尾道学』と映画フィロソフィック』(中川書店、二〇〇三年)、荒木正見・小津安二郎監督作品『東京物語』と尾道という『場所』(『地域文化研究』一九号、二〇〇四年)が挙げられる。
- (16) 大林宣彦監督による尾道三部作は『転校生』(一九八二年公開)、『時をかける少女』(一九八三年)、『さびしんぼう』(一九八五年)、新尾道三部作は『ふたり』(一九九一年)、『あした』(一九九五年)、『あの、夏の日』(一九九九年)である。そのほか『野ゆき山ゆき海ゆき』(一九八六年)、『マスケ先生』(二〇〇〇年)も尾道を舞台にしている。
- (17) 川本三郎『日本映画を歩く。ロケ地を訪ねて』(JTB、一九九八年、後に中公文庫に収録)。
- (18) 大槻ケンヂ『行きそで行かないとこへ行こう』(学習研究社、一九九二年、後に新潮文庫に収録)。

(1) 田沼雄一『映画を旅する』（小学館、一九九六年）。

(2) 注19、224ページ。

(3) 『かみちゅ!』（テレビ朝日系列、二〇〇五年、原作：ベサメムーチョ、監督：舛成孝二、製作：アニメレックス。アニメを原作とした漫画も作成されている（鳴子ハナハル『かみちゅ!』全二巻、メディアワークス、二〇〇六年、二〇〇七年）。

(4) ただし、制作担当プロデューサー落越友則氏、監督舛成孝二氏、シナリオライター倉田英之氏が尾道を訪れ、取材したことが新聞記事として二〇〇四年九月二五日の『山陽日日新聞』に掲載された。

(5) 本稿における撮影写真は全て筆者によって二〇〇八年八月二〇日に撮影されたものである。

(6) 小林俊彦『はすてる』全二巻（二〇〇九年一月現在、講談社、二〇〇二―二〇〇九年）。

(7) たなかのか『タビと道づれ』全四巻（二〇〇九年一月現在、マッグガーデン、二〇〇七年、二〇〇八年）。

(8) 広島アニメーションエンターレ2008協賛事業「かみちゅ!」展（尾道に見るアニメの原風景）（日時：二〇〇八年八月八日（金）～八月二四日（日）十時から十九時、会場：尾道商店街三井住友銀行尾道支店界隈の空き店舗、主催：かみちゅ!展実行委員会、協力：アニメレックス・チャイサロンドラゴン）。

(9) 来場人数は「かみちゅ!展からの道」の二〇〇八年八月二五日の記事より（<http://blogs.yahoo.co.jp/kamien2008/1542786.html>）筆者による最終閲覧日は二〇〇九年二月二五日。

(10) つくば泥酔パレード研究所『Omegaの巡礼 Ver1.0 ミチの始まり』（つくば泥酔パレード研究所、二〇〇八年）。

(11) 「舞台探訪アーカイブ」（<http://legwork.hatenan.jp/>）を参考にした。筆者による最終閲覧日は二〇〇九年二月二六日。

△付記▽

本稿を執筆するにあたって株式会社フロム・ソフトウェアの三宅陽一郎さん、国際大学GLOCOM研究員／助教の井上明人さんには様々なご助言をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。また、本稿は財団法人福武学術文化振興財団平成二十年度瀬戸内海文化研究・活動支援助成による成果の一部である。